

## 1970 年代のイタリアにおける民主的言語教育の構築

—— トゥッリオ・デ・マウロの構想した言語教育と plurilinguismo ——

西 島 順 子

京都大学大学院 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

**要旨** 本稿は、1970 年代のイタリアにおいて展開した民主的言語教育の複言語主義の概念と起源を、トゥッリオ・デ・マウロの言説をもって解明した。民主的言語教育は欧州評議会の言語教育理念である複言語主義と親和性があるといわれているが、両者は政治的な文脈も時代も異なるものである。民主的言語教育を学界に提唱した言語学者デ・マウロは、それを提唱する以前の 1960 年代から 1970 年代にかけて、論考などにおいて複言語主義を意味する plurilinguismo を使用していた。デ・マウロが使用するこれらの plurilinguismo を分析・分類したところ、三つに分類された。第一に「複言語状態」（ある領域において複数の言語が共存する状態、つまり多言語状態・一つの個別言語にさまざまな言語の性質が共存する状態・言語に多様な表現記号が存在する状態）、第二に「複言語政策」（多言語地域において政治的に複数の言語使用を認める政策）、そして最後に「複言語能力」（個々人の言語体験によって蓄積された複数の言語を、コミュニケーションや創作活動において用いる能力）を意味していた。また、その起源を考察すると、「複言語状態」「複言語政策」はソシユールの理論や記号学などの一般言語学、そして歴史的・地理的言語研究に由来することが判明した。その一方で「複言語能力」はデ・マウロの政治思想を内包しており、グラムシの言語哲学の影響を受け「複言語教育」としての民主的言語教育へと展開したことが明らかとなった。

## 1. はじめに

本稿は 1970 年代のイタリアで提唱された民主的言語教育が内包する複言語主義の概念と起源について解明し、イタリアの言語教育の歴史的な文脈における民主的言語教育の意義を明らかにする。

現在、言語教育において一般的に理解されている複言語主義とは、欧州評議会が推進する言語教育理念である。欧州評議会は人権や民主主義、法の支配などの分野で価値観を共有するため 1947 年に設立された機関である。その政策の一つに言語教育も含まれており、2001 年に、ヨーロッパ統合の動きから、域内における就学・就労による人的移動を容易にするための外国語教育の共通参照枠となる *Common European Framework of Re-*

*ference for Languages* (以下「CEFR」) が発行された。この CEFR が提起する言語教育理念が複言語・複文化主義と呼ばれている。

複言語・複文化主義とは、それぞれの文化的背景の中で広がってゆく多様な言語体験が、個々人の中において複数の言語・文化能力として相互関係を築き、作用しあうことであり、その複層的な能力を認めることである (Council of Europe, 2001)。この理念のもと、欧州評議会の言語政策は複言語主義、言語的多様性、相互理解、民主的市民性、社会的結束性をキーワードとして展開している (Council of Europe, 2007)。近年、世界各地で自民族を中心とする排他主義が広まりつつあり、ヨーロッパも分断に向かっているように見えるが、欧州評議会の言語教育政策は統合へのアプローチを進めている。

複言語主義, すなわち現在, 欧州の言語教育で一般的に使用されている plurilinguisme は 1956 年にフランスの社会言語学者コーアンがスイスを「多言語国家」と形容するために使用したことになり, 1990 年代後半から, 欧州評議会の言語政策において議論されるようになった(西山, 2010, p. 27). しかし, それとは政治的に異なる文脈において, またそれ以前の 1970 年代のイタリアで, 複言語主義に親和性の高い理念をもつ *educazione linguistica democratica* (以下, 「民主的言語教育」と訳す) という言語教育改革が進められていた。

これは言語学者トゥッリオ・デ・マウロ (1932-2017) の提案した言語教育思想である。1970 年に *Società di Linguistica Italiana* (イタリア言語学会: SLI) の分科会である *Gruppo di Intervento e Studio nel Campo dell'Educazione Linguistica* (言語教育研究介入グループ: GISCEL) が発足し, 議論を重ねたのち, 1975 年に同分科会より *Dieci Tesi* (10 の理論) と題されたイタリアの学校教育における言語教育改革の提言として発表された。この提言は 10 章から構成されており, I~IV は口語の重要性, V~VII は伝統的言語教育への批判, VIII は民主的言語教育の提案, IX~X は学校改革や教育編成への提案から成り立っている (GISCEL, 1975)。この言語教育改革の提言の背景には, イタリアにおける公教育の不平等が存在し, デ・マウロは言語格差にその原因があると考えていた<sup>1)</sup>。その後, この提言が契機となり, デ・マウロの訴える理念は, 1977 年に中等教育に関する法律第 348 条に「より適切なイタリア語 (ラテンの起源や歴史の変化に触れながら) や外国語教育を通して, 言語教育を強化すること」という文言が追加されることによって具体化し<sup>2)</sup>, それまでの伝統的言語教育を見直す動きが開始された。

民主的言語教育は近年になり, 言語教育の有意義な活動であると評価されるようになった (Costanzo, 2003; Balboni, 2009; Lo Duca, 2013)。中でもコスタンツォ (2003) は, *Dieci Tesi* の VIII の主張を改めて力説し, 教育において生徒が生まれた社会的環境に言語・文化を固定するのではなく, 民主的言語教育によって生徒が本来持つ言

語・文化を豊かに広げるべきであると提言する。また, 70 年代のイタリアにおいて多様な少数言語や方言の承認が進められていたことを解明すると同時に, このような状況が現在のヨーロッパの複層的な言語状況に類似しており, その上でイタリアの民主的言語教育と現在のヨーロッパの複言語・複文化主義との親和性を指摘している。民主的言語教育とは複言語・複文化教育の先駆けとなり, ヨーロッパ全体に移行できるとコスタンツォは主張するのである。その他の先行研究も, 言語学や言語教育史の視点から民主的言語教育改革についての考察はなされている。しかし, 現在の複言語・複文化主義との親和性をめぐる歴史的検証に耐えうるような研究はまだなされていない。

## 2. 民主的言語教育における plurilinguismo

コスタンツォ (2003) では民主的言語教育と複言語主義との親和性が指摘されている。しかし, *Dieci Tesi* には複言語主義を意味する *plurilinguismo* という用語は使用されていない。そこで本稿では, 民主的言語教育と複言語主義の関連を検証するために, 民主的言語教育が発表されるまでの約 10 年間の資料として, デ・マウロの 1965 年頃から 75 年頃にかけての言説を分析する。

デ・マウロはイタリアの一般言語学者・言語哲学者であり, 学界においてはローマ・サピエンツァ大学の文学部教授や学長, また, 政界においてはラツィオ州の県議会議員や第二次アマート政権 (2000-2001) の教育省大臣などを務めている。デ・マウロは生涯を通して数多くの執筆を行ったが, なかでも言語状況や言語教育に関する論考や評論において, 1960 年代から *plurilinguismo* という用語を用いていた。

そもそもイタリアにおける *plurilinguismo* は, 1951 年に文芸批評家であるジャンフランコ・コンティーニ (1912-1990) がラテン語や俗語などさまざまな言語を使用したダンテの作品の特徴を形容するために使用したことがその始まりである (Contini, 1951, p. 5)。「一人の作者, もしくは一つの作品内で複数言語を使用すること, もしくは表現方法やスタイルの違う言葉のタイプやレベルの

使用をすること」<sup>3)</sup> という意味で、*plurilinguismo* という用語はもっぱら文学評論の分野で使用されていた。イタリアはもとよりヨーロッパの言語教育にも使用されていなかった *plurilinguismo* という概念は、デ・マウロによって1960年代から70年代、イタリアの言語教育にて導入された。そこで、デ・マウロが構想した *plurilinguismo* の概念を明らかにするため、本稿ではこの用語が使用されているデ・マウロが手掛けた文献を分析、考察し、その意義を明らかにする。

分析の対象は *Storia linguistica dell'Italia unita* 『統一イタリアの言語史』(De Mauro, 1963), *Le parole e i fatti* 『言葉と行動』(De Mauro, 1977), “Il plurilinguismo nella società e nella scuola italiana” 「イタリアの社会と学校における複言語主義」(De Mauro, 1975a) の三つとする。また、本稿ではデ・マウロが使用するこの用語の多義性を尊重するため、あえて日本語に直すことなく *plurilinguismo* として表記する。

## 2.1 着想期

デ・マウロが初めて *plurilinguismo* という用語を用いたのが、第一の書であり、イタリア国家統一の1861年から1960年までのイタリア語の変遷を社会的・歴史的視点から分析した *Storia linguistica dell'Italia unita* (De Mauro, 1963) においてである。本文には *plurilinguismo* はこの形態では使用されていないが、巻末の「主題索引」に本文中の2か所を参照するよう指示されている。

初出の参照箇所は17頁にある。イタリアが他の地域とは異なる言語的状况を持ち、イタリア統一期も近年も、依然、少数言語を内在しているとの記述がある。フランス語系のガッロロマンツォ語(プロヴァンス語とフランコプロヴァンス語)とフランス語を話す西アルプスの共同体においては、イタリアの自由な法の下において、その摩擦や障害が取り除かれており、その状態を *quadri-linguismo* (四言語併用)(すなわちリグーリア方言かピエモンテ方言、プロヴァンス方言かフランコプロヴァンス方言、イタリア語、フランス語が相互使用されている状態)と呼んでいる。

イタリアには複数の少数言語が存在しているが、

ここは西アルプス共同体の少数言語について論ずる箇所である。西アルプス共同体はフランス語、フランス語系のガッロロマンツォ語(プロヴァンス方言とフランコプロヴァンス方言)、イタリア語、イタリア語系のイタロロマンツォ語(リグーリア方言やピエモンテ方言)を話す地域である。四つの言語の使用は法的にも認められており、その状況を *quadri-linguismo* (四言語併用)と呼び、それは実際的狀況であると記述している。

その地域に関して詳述しているのが、次に索引が指示する298-301頁である。そこでは、イタロロマンツォ語とガッロロマンツォ語の言語境界線はイタリア半島全体に見られる現象を表す顕著な証拠であるとしている。ピエモンテ州、つまり西アルプス地域に関しては、イタリアの国家統一より300年も前の1560年と1577年にサヴォイア家によって二言語使用を認める法令が發布され、それにより政治の保護のもとで *bilinguismo* (二言語併用)<sup>4)</sup> の聖域が形成された。そのため、イタリア王国統一期の1859年に同じくサヴォイア家の下で定められた教育法、すなわちカザーティ法ではフランス語圏におけるイタリア語とフランス語の二言語を使用する教育が認められた。その後、ファシズム政権<sup>5)</sup>が崩壊すると、今度は自由な制度の下で再びその権利が守られることになる<sup>6)</sup>。これがこの地域において少数言語であるフランス語を保護する要因となり、年月を経てもなお、イタリア語とフランス語が共存する状況になったとデ・マウロは分析する。

この2か所は両者とも西アルプス共同体の少数言語の状況を分析するものであり、それはイタリアの一地域の例示であるが、広義に解釈するならば、*plurilinguismo* はある地域における複数言語の共存を意味している。そしてこの地域が *bilinguismo* (二言語併用)、もしくは *quadri-linguismo* (四言語併用)の状況にあること、つまり多言語状況であることを表している。また、その地域では、複数の少数言語に政治的な権利が与えられ、認められていることから、*plurilinguismo* は法的に複数の言語を承認する言語政策の意味も内包している。このことから、デ・マウロは1963年の段階で *plurilinguismo* を多言語状況と多言語政策

を指示する概念と理解していることがわかる。

## 2.2 構想期

*La storia linguistica dell'Italia unita* (De Mauro, 1963)の刊行後、デ・マウロは plurilinguismo の概念を共産党夕刊紙 *Paese Sera* に寄せた評論で使用。デ・マウロは青年期より左派イタリア自由党に入党するなど政治に強い関心を寄せており、1975年から1980年にかけてはイタリア共産党から無所属議員<sup>7)</sup>としてラツィオ州の県議会議員に選出された経歴もある。デ・マウロは議員として選出される以前の1966年から1977年まで *Paese Sera* に定期的に評論を掲載しており、1970年から1976年の評論は *Le parole e i fatti* (1977) に再録された。*Le parole e i fatti* には plurilinguismo (5か所)、plurilingue (1か所)、plurilinguistico (1か所) という語が散見される。しかし、それらの意味は一致しておらず、明確な定義は認められない。しかしながら、これらを意味内容によって区分すると三つの要素に分類することができる。

まず初めに、イタリア統一期の言語状況について記された評論を検討する。下線は筆者による。

方言の伝統、つまりイタリア国家の言語的伝統ともいえる plurilinguismo の復権は、100年前のデ・サンクティスやコンパレッティ、アスコリにとっては文化や政治の政策の一つであった。それは今日においても、庶民階級がほとんどを占めるといふ実際の状態やその要求に応えるために、学校制度を真に開放する政策の本質的な要素として存在する。

（“La funzione dei dialetti” 11 ottobre 1974, p. 230）

ここでの100年前とは19世紀半ばのイタリア統一期を指す。その時代までイタリアは小国に分かれており人的移動が制限されていたことから、コミュニケーションが取れないほど異なる方言や、過去の入植において残された言語が少数言語として各地に存在していた (De Mauro, 1963, p. 42, pp. 205-207)。

そのような言語状況下で1861年に国家統一を

果たしたイタリアは、1859年に制定したカザーティ法 (315条) によってトスカーナ方言をイタリア語と規定し、初等教育ではトスカーナ方言、すなわちイタリア語の教育を義務付けた。その後、1868年には、アレッシンドロ・マンゾーニ (1785-1873) を教育省の委員長として迎えた。マンゾーニは「方言の雑草」を根絶させ、フィレンツェ語 (トスカーナ方言に由来する「生きたフィレンツェ方言」) を唯一の言語として言語統一を図ったが (Ibid, p. 82), そのマンゾーニの言語政策に意義を唱えたのが哲学者のフランチェスコ・サヴェリオ・デ・サンクティス (1817-1883) やドメニコ・コンパレッティ (1835-1927)、言語学者のグラツィアディオ・イザイア・アスコリ (1829-1907) であった。例えばアスコリは、イタリアは言語的に断片化しており、トスカーナ方言を統一言語と定めることは現実的ではないと訴え、マンゾーニと対立していた (Ascoli, 1873)。この学者たちは plurilinguismo の復権を主張し、イタリアの伝統としての方言などを文化政策や政治政策、学校制度に反映させることを強調しており、デ・マウロは plurilinguismo の復権を説いたこれらの哲学者や言語学者に同意している。

この plurilinguismo はイタリア国家において方言などの複数言語が共存する状態を指すことから、多言語状態を指示していると理解できる。さらに、デ・マウロは多言語状態を取り戻すための政策をも構想していたのである。

続いて劇作家ジュリアーノ・スカビア (1935-) に言及した評論を検討する。( ) は筆者による補足である。

(言語について) もし、発展的で実践的なスカビアの試みを同じようにたどるとしよう。そうすれば、新しい創造の視点をもって、近年、(言語) 空間や文化層を自由に往来していることに気が付く。わずかながらではあるがスカビアのように、当然とされていた区分や境界をもう一度議論しながら、また、すべての文化的財産に由来する表現形態を使い、思考や能力を促進させながら、この試みは特権を持つわずかな人のためだけではなく、す

べての人のためである。私たちの文化的財産はまさに、グラムシが見ることができたように、また、チェッローニも近年、繰り返したように、plurilinguismo が勝ち残り、本来備わっている異種混交性の中に、国家の特有性が見られることである。

(“Cultura Francesca” 27 febbraio 1976, p. 265)

スカビアはイタリアの諸言語を用いつつ、誰もが理解できる言語を模索していた。スカビアの試みた言語への新たな挑戦はイタリアという国に存在する複数言語を再認識させるもので、複数の言語を融合し、言語の境界を越える可能性を示唆している。デ・マウロはスカビアを参照しながらも、同様に言語の複数性を認識していたマルクス主義の思想家であるアントニオ・グラムシ (1891-1937) や法学者であるウンベルト・チェッローニ (1926-2007) に言及し、その主張の正当性を訴えている。たとえばグラムシはサルデーニャ島の出身であり、サルデーニャ語を生涯にわたって話し言葉として使用していたと同時に、イタリアには当時もなお、多くの個別言語があることを認識していた (Carlucci, 2005, p. 77)。彼らが考えたように、イタリアでは plurilinguismo が「勝ち残った」、つまり、イタリアには複数の言語が現在も減びることなく残り、存在している。これがイタリアの特性であり、価値のある文化であるとデ・マウロは確信している。このような文脈を見ると、ここで用いられている plurilinguismo は複数言語が勝ち残った状態、つまり複数言語が共存している状態を指すことが判明する。

次に詩人・映画監督のピエル・パオロ・パゾリーニ (1922-1975) の言語体験に言及する評論を検討する。

20歳のパゾリーニにとって、イタリア社会はいまだ、豊かな複言語 plurilinguistiche の枠や層のすべての豊かさがあった。(…) 1940年頃、彼はレッジョ・エミリアとボローニャで高校や大学に通い、夏にはカザルサに滞在した。パゾリーニはエミリア方言やカザルサの西フリウリ語、またおそらく、ブ

ルジョアで洗練されたヴェネト語、都会的な言語、そして当然、学校やラジオのプチブルジョア的なイタリア語の使用を体験している。

(“Pasolini : della stratificazione delle lingue all’unità del linguaggio” ottobre 1976, p. 249)

ここでデ・マウロはパゾリーニが若かりし頃に過ごした環境に言及しながら、パゾリーニがいかに豊かな複言語状況に身を置いていたかを例証している。イタリア中部のボローニャに生まれたパゾリーニは学生時代をそこで過ごし、夏に滞在したイタリア北東部の少数言語地域であるヴェネツィア・ジュリア州のカザルサでは西フリウリ語やベネツィアの言語に触れていた。また、地域の領域だけではなく、都会的な言語や学校で学ぶスタンダードなイタリア語などの社会的領域が異なる言語も知っていたとデ・マウロは言及している。パゾリーニの経験を通じて、デ・マウロは豊かなイタリアの多言語状態を喚起しており、plurilinguismo はそのような状況の記述に用いられている。

これら三つの引用を検討すると、plurilinguismo という概念はイタリアという地域や国家に複数の言語が共存している状態、つまり多言語状態を表していることが判明する。De Mauro (1963) は、西アルプスに言及するのみであったが、この三つの例は西アルプス地域に限らず、イタリア半島にある少数言語やイタリアの変種としての方言だけではなく、社会階層によって異なる言語も含まれている。デ・マウロはそのような多言語状況を意義あるものと判断し、多言語の共存する政策を構想していた。

次に、スペインのカタルーニャにおける反政府活動家サルバドル・プッチ・アンティック (1948-1974) に対して死刑が執行された出来事<sup>8)</sup> について言及した論評を検討する。

とにかく、それ (アンティックの事件) に向き合い、考察するならば、plurilinguismo というものは問題となる。まず、現実的な視点から、つまり現在、世界で話されている言語はいくつなのかという点からの問題である。

(…) 30年代初頭の民族学辞書では12,000以上の言語の異なる民族社会グループを数えた。それに対し、他の研究者たちも、地域の純粋さを持たない個別言語を参照しながら、ある領土における地域方言のバリエーションを知ることには価値を置き、いくつかの個別言語は3000以上に達するとも判断する。

(“Esperanto e Babel” 22 marzo 1974, p. 281)

デ・マウロはナショナリズムが引き起こす悲壮なカタルーニャの事件を例として、このようなナショナリズムは常に言語の問題を伴うことを指摘している。その例として、世界には言語が異なる数多くの民族グループが存在しているうえに、個別言語によっては3000以上の言語(変種)を包括していることをあげている。このことからデ・マウロは多くの言語がこの世界に存在し、その一つの個別言語たりとて、いかに複層的で、純粋ではないかを明示している。

デ・マウロのこの見解からわかる plurilinguismo の概念は、一言語=単一で純粋な言語ではなく、ひとつの言語が複数のバリエーション(変種)を内包することが判明する。デ・マウロがカタルーニャを参照の上で主張したかったことは、ナショナリズムの内包する言語観である。ナショナリズムは言語のように複層的で分割が困難なものに民族という境界線を引きたがる。しかし、そもそも言語は複数性を内包しているため、一国家一言語、一民族一言語という考え方にそぐわない。そのため、ナショナリズムに対峙するとき、plurilinguismo は問題になるのである。

次に、移動型民族であるロマの言語について述べられた評論を検討する。

(ロマに関して) ヨーロッパ、いやイタリアやその各地方をさすらう多くのグループの話し方は、異なる多彩なモザイクである。gagè の話し方に類似したさまざまな段階があり、より古典的なジプシー(原文翻訳ママ)の個別言語を保ち、交差させたものである。ジプシー(原文翻訳ママ)にとって、言語の国語純化論やナショナリズムを植え付けることは

知るところではない。彼らは、慣習の奴隷にはならず、理解させるため、また理解するために言葉を操っている。よって、二言語、もしくは複言語 plurilingue 環境に入れられた子供たちは自由な使用と柔軟さをもって、必要に応じて、言葉を形作り、変形させ、混合させ、循環させる。

(“Zingari : perché la persecuzione”

29 agosto 1975, p. 302)

ロマはインド・イラン語系のロマニ語という個別言語を話すが、国境をまたいだ移動生活を続けるため、その個別言語は当然同じ民族であっても同質のものではない。なぜならロマたちは彼らが持つ言語に、各地域の「gagè の言語」を自由に、また柔軟に取り入れているからである。gagè とはロマがロマではない者を呼ぶ呼び名である。例えばイタリアをさすらうロマにとってイタリア人は gagè である。この gagè の影響を受けたロマの言語は一つの個別言語であっても多様であり、デ・マウロはそれを「異なる多彩なモザイク」と表現し、その言語環境を複言語 plurilingue 環境と形容している。つまり、plurilinguismo とはロマの個別言語のように各地の言語の影響を受け、それらの性質を包含した多様で複層的な言語を指すのである。

この二つの引用から、デ・マウロが plurilinguismo について、一つの個別言語であっても、それは純粋なものではなく、変種を内包しており、外部からの影響を取り入れ、多様に変化している状態と認識していることが明らかである。つまり、plurilinguismo は一つの個別言語が複数の言語の性質を持つ状態である。

本節の最後に、パゾリーニの言語体験に関する論説を再度取り上げ、検討し、plurilinguismo のもう一つの要素を明らかにする。

パゾリーニの全体的な特性は、彼が控えめな人物であったことと、イタリアの特徴である plurilinguismo の真の使用者だったことである。パゾリーニはある plurilinguismo を実践に移した考案者で、またある plurilinguismo

を鋭い内省の手段として用いた批評者だった。それは他の試みから見ても、冷静であり、実証に基づいており、先見性があった。

(“Pasolini : della stratificazione delle lingue all’unità del linguaggio” ottobre 1976, p. 249)

ここでデ・マウロはパゾリーニの人物像に加えて、使用する言語の特殊性を強調している。そして、パゾリーニが真の plurilinguismo 使用者であったと述べている。しかし、なぜデ・マウロにとってパゾリーニが真の plurilinguismo の使用者であり、また、考案者であり、批評者であったのか。その理由を後の文脈をもって検証する。

イタリアの plurilinguismo に関して、パゾリーニはコミュニケーション上の使用者としてだけではなく、文学や芸術の創造者としても複数の言語を使用していた。カザルサでは今でも 80% の住民がイタリア語ではなく地域の個別言語を話すことを好むが、そこへ帰省する中で、パゾリーニは母なる西のフリウリ語に憧れ、大胆な試みを行った。それは偉大なエルメティズモの詩や、ヨーロッパの印象派やフランス語、英語、イタリア語をフリウリ語に適応させ、翻訳するものだった。そこでパゾリーニは《方言による詩には限界がある》という答えに達した。

(“Pasolini : della stratificazione delle lingue all’unità del linguaggio” ottobre 1976, p. 250)

パゾリーニは青年期に、イタリアの多言語状態を生きる中で、各地で複数の言語体験をしたと言及した。その言語体験はパゾリーニ個人に眠っていたわけではない。蓄積された言語体験は、コミュニケーションだけではなく、創作活動にも現れた。その一例は、ここに示されているように、他の言語で書かれた作品を少数言語である西フリウリ語を用いて翻訳することであった。また、パゾリーニは、イタリア語そのものを疑問視し、真の国語としてのイタリア語は存在しないという前提条件で、今後は科学技術などの新語を取り入れた北イタリアの工業地帯の言語を中心に据えるべ

きだという論を主張していた<sup>9)</sup>。それらの事実からすると、デ・マウロが、パゾリーニを plurilinguismo の使用者であり、考案者であり、それを内省手段として用いた批評者であったと述べたことも妥当である。

このパゾリーニに関する記述から導き出される plurilinguismo とは、ある個人が表現する際に複数の言語を使用する行為であり、その能力を意味することになる。その複言語能力はコミュニケーションにおいても、ある作品の創作においても使用されるものである。デ・マウロにとって、パゾリーニとは plurilinguismo の能力を持ち、実践していた一人なのである。

ここまでをまとめると、De Mauro (1963) では plurilinguismo を西アルプスのフランス語とイタリア語の二言語併用が政治的に認められた多言語地域を指示するにとどまっていたが、De Mauro (1977) では plurilinguismo が、イタリア半島全体を対象とした「ある地域における多言語状況」、国家の言語やロマの個別言語を前提にした「ある言語（個別言語）に内在する複数性」、複言語使用者としてパゾリーニを対象とした「個人が持つ複数の言語能力」へと概念を拡張していったことが判明する。デ・マウロはこの共産党紙 *Paese Sera* の文化欄における自由な文筆活動を通して plurilinguismo の思想を発展させ、多様な角度から熟考していたことが読み取れる。

### 2.3 デ・マウロ自身による集成

民主的言語教育を発表した 1975 年にデ・マウロは plurilinguismo と学校教育に関する論考、“Il plurilinguismo nella società e nella scuola italiana” (De Mauro, 1975a) を執筆している。その論考において、デ・マウロは以下の通り plurilinguismo における三つの要素を明確に、また端的に表している。

plurilinguismo によって、さまざまなタイプの言葉（話し言葉、身振り、iconico など）、つまり記号のさまざまなタイプ、異なる個別言語、同一の個別言語を実現するさまざまな規則の共存を解釈する。それは人類の、すな

わち人間社会の永続的状態である。

(p. 124)

この引用の指摘する plurilinguismo の三要素とは「さまざまなタイプの言葉（話し言葉、身振り、iconico など）、つまり記号のさまざまなタイプの共存」、「異なる個別言語の共存」、「同一の個別言語を実現するさまざまな規則の共存」である。

第一の要素は「さまざまなタイプの言葉（話し言葉、身振り、iconico など）、つまり記号のさまざまなタイプの共存」である。ここでの言葉 *linguaggio* とは伝達における言語の意味であり、その中に、話し言葉や身振り、そして *iconico* などの記号が含まれると述べている。この *iconico* とは *icona* の形容詞であり、日本語ではアイコンと訳される。アイコンとは記号論の用語で、「示された現実との類似関係を持つ記号」<sup>10)</sup> を意味する。ここでは伝達における言語のアイコンについて明示されていないが、これと同年に執筆された“*Per una educazione linguistica democratica*”「民主的言語教育のために」(De Mauro, 1975b, p. 121) を参照すると、話し言葉ではないすべての表現として、手振り *mimico*、身体表現 *figurativo*、身振り *gestuale*、音楽 *musicale* などをあげている。このことからアイコンとは、コミュニケーションで利用できる、手振りや身体表現などの表象を表していることがわかる。つまり、「記号のさまざまなタイプ」とは話し言葉、身振り、あるいは手振りや身体表現を指す。すなわち、*plurilinguismo* の第一の意味は、伝達手段として言語をとらえた場合、話し言葉だけではなく、ジェスチャーやそのほかの表象などを含めるもので、多様な記号が存在する状態を示している。これは De Mauro (1963) や De Mauro (1977) では言及されていない事象である。

第二の要素は「異なる個別言語の共存」である。これに続く節には、イタリアには誰もが知っている矛盾があることを強調する。それは、異種の個別言語、つまり約 10 の少数言語や、無数のイタリア語方言が存在している状況である。これは De Mauro (1963) や De Mauro (1977) で見られた *plurilinguismo* の一つ、ある地域における個別言語の複数性、つまり多言語状態に対応する指摘

である。

最後の要素は「同一の個別言語を実現するさまざまな規則の共存」である。これに関して、「現在、多くの移民を介してなされる人工的言語や形式的言語、もしくは科学形式的言語の例外的発展は、(…) 想像を超えて、人間社会の複言語能力 (*la capacità di plurilingue*) を高める」とデ・マウロは説明を加えている。ここで人工言語や形式的言語、科学形式的言語は明確に定義されていないが、エスペラントのような言語を指すと考えられる。なぜなら、デ・マウロはエスペラントについて国際的言語としての役割を果たすために、入念に創造された人工言語であると述べているからである (De Mauro, 1977, p. 283)。エスペラントの語彙はロマンス語とゲルマン語の中で最も共通した語根が選ばれており、文法も現代ヨーロッパの諸言語の文法を簡略化したものである (プリバー 1957, pp. 33-36)。このようにエスペラントは複数言語の規則や語彙から創造された言語であり、ここで述べられている「同一の個別言語を実現するさまざまな規則」をもつ。とはいえ、これはエスペラントのような人工言語に限ったことではない。例えば De Mauro (1977) で言及するように、一つの個別言語が 3000 もの変種を内包していることや、ロマの個別言語が地域言語の影響を受けて多様性があることにも共通する。つまり、第三の *plurilinguismo* の要素は、ある個別言語が複数の言語の性質を持つ状態を示している。

この引用にある三要素を明瞭に規定すると、*plurilinguismo* は「言語に多様な記号が存在する状態」、「ある地域における多言語共存状態」、「ある個別言語にさまざまな言語の性質が共存する状態」を意味すると言えよう。

デ・マウロの思想の展開を追う限り *plurilinguismo* は多義的であるが、それは大きく三つに分類できる。「複言語状態」「複言語政策」、そして「複言語能力」である。まず「複言語状態」に関しては、さらに三つの要素がある。「ある領域において複数の言語が共存する状態 (多言語状態)」、「一つの個別言語にさまざまな言語の性質が共存する状態」、「言語に多様な記号が存在する状態」である。次に「複言語政策」は多言語地域



において政治的に複数の言語使用を認める政策であり、最後の「複言語能力」は個々人の言語体験によって蓄積された複数の言語を、コミュニケーションや創作活動において用いる能力である。

これらがデ・マウロの構想する plurilinguismo の概念であり、民主的言語教育へ発展するものであった。ではなぜ、デ・マウロはこのように plurilinguismo を理解するに至ったのか、またなぜ、この plurilinguismo が言語教育へ向けられたのか、ここまでのところ明らかにされていない。そこで、この plurilinguismo の起源を明らかにし、民主的言語教育へ向けた理念としての発展を解明したい。

### 3. デ・マウロの plurilinguismo の由来とその展開

Plurilinguismo は 1951 年にコンティニーが文芸批評の文脈において使用して以降、「一人の作者、もしくは一つの作品内での複数の言語スタイルや言葉の使用」<sup>11)</sup>として用いられていたが、1963年にデ・マウロは言語学の文脈へと借用し、1970年代に展開させ、「複言語状態」「複言語政策」「複言語能力」へと発展させた。本節では、この概念がどこから生まれ、なぜ言語教育へ方向づけられたのか考察する。

#### 3.1 言語学研究を起源とする plurilinguismo

まず plurilinguismo の「複言語状態」と「複言語政策」の起源を検討する。そこで、デ・マウロの一般言語学と社会的・歴史的言語研究の成果を振り返りたい。デ・マウロの言語観にはソシュール研究が大きく影響している。デ・マウロは言語学者フェルディナン・ド・ソシュール (1857-1913) の弟子たちがすでに出版していた *Cours de linguistique générale* 『ソシュール一般言語学講義』(1916) に第三者の論文や批判を加え、解説した *Corso di linguistica generale, Introduzione, traduzione e commento* 『ソシュール一般言語学講義』校注』を 1967 年に出版しており、ソシュールの理論に傾倒していた。

まず、「複言語状態」の第一の要素、「ある領域において複数の言語が共存する状態 (多言語状

態)」を考察すると、これはソシュールの「地理的多様性の複合化」の考え方と一致する。ソシュールは、同一地点における複数の言語の共存を論じ、その例として、アフリカの現地語と植民地化によってもたらされたオランダ語や英語の共存や、自然発生的な個別言語と文学言語<sup>12)</sup>の二言語使用などをあげている (デ・マウロ, 1976, pp. 239-242)。また、「地理的多様性の諸原因」という概念もデ・マウロの主張に近い。たとえある地域において、同じ言語が一律に話されていたとしても、言語活動に絶対的な不動というものは存在しないため、時間の経過とともに言語は進化する。また、その進化は一律でないため、多様に変異する (Ibid., p. 245)。

デ・マウロはこのようなソシュールの理論を援用し、*Storia linguistica dell'Italia unita* (1963) では統一前後のイタリア半島の言語現象を観察し、少数言語だけではなく、方言に関しても多くの先行研究に基づく考察を行った。デ・マウロはその言語状況について、アスコリの表現を借りて、「イタリアはローマ統治崩壊以降の 3, 4 世紀から 1860 年の統一まで同質性を保つ求心力がなく、地域ごとに言語の不一致が生まれた」(De Mauro, 1963, p. 22) と分析し、その言語の不一致を「方言の《森》」と形容し、歴史的な視点から、異なる個別言語や方言の《森》が形成されてきたと評している (Ibid., pp. 25-29)。また、この異なる個別言語が意思疎通をも困難にしていたことも指摘し (Ibid., p. 42)、各方言の音声、形態、語彙、統語の構造の差異を先行研究から分析している (Ibid., pp. 372-404)。

これらの分析をみると、デ・マウロがある領域において複数の言語が共存する状態 (多言語状態) を普遍的事実と認識しており、その状況を可能にするための政策として複言語政策を把握していたことが判明する。

次に「複言語状態」の第二の要素、「一つの個別言語にさまざまな言語の性質が共存する状態」の起源を考察する。これはソシュール言語学の最も重要な概念であるラングとパロールに一致する。ソシュールの理論によれば、ラングとは言語活動において、社会集団により採択された、必要な慣

例の集合体であり、ラングはそれ自体一つの全体であり、分類の原理を構成する。一方、パロールとは意思と知性の個人行為であり、個人はラングのコード（規則）を使って思考を音韻化し、表出することができる。パロールによる思考の外化はラングによって個人に約束されている。しかし、その表出は付随的で、多少なりとも偶然なものとなる（デ・マウロ、1976, pp. 18-26）。つまり、ラングはコード（規則）を持ったある言語であり、個人の言語活動はその規則性に従って行われるものの、ひとたびパロールとなって音韻化され表出されれば、完全にラングに一致することはなく、単一なものでも純粋なものでもなく、そこには豊かなバリエーションがある。これは規則を持つある言語にさまざまな性質が含まれていることを意味する。

また、ソシュールは個別言語についても以下のように主張する。「イディオム（特有語<sup>13)</sup>）という用語は、ある共同体に個別の特徴を反映するものとしての言語をきわめて的確に示して（本文ママ）」おり、続けて「ごくわずかな程度しか変わらない特有語は、方言と称される（本文ママ）」と明言する（Ibid., p236）。ここでのイディオムとは個別言語のことである。つまり、ある個別言語にはわずかの差がある言語（変種）が方言として存在すると強調するのである。

ソシュールのこの二つの概念は、一つの個別言語にさまざまな言語が共存する状態という複言語状態を想起させる。一つの個別言語の内部に規則が異なる多様な言語変種が存在することが *plurilinguismo* であるという認識をデ・マウロが持ったのは、このソシュールの理論を熟知していたからに他ならない。

最後に、「複言語状態」の第三の要素、「言語に多様な記号が存在する状態」の起源を考察する。デ・マウロが記号としてあげたのは、話し言葉、身振り、アイコンであるが、ここで着目するのは「記号」と「アイコン」という記号学の用語である。これらはソシュールと哲学者チャールズ・サンダース・パース（1839-1914）の理論に起源がある。

まず記号に関しては、ソシュールの理論があげ

られる。ソシュールは、言語の記号は、概念を表すシニフィエと音響イメージを表すシニフィアンによって構成されていると定義した。また、このシニフィエとシニフィアンをむすびつけるきずなは恣意的であるとし、たとえパントマイムのような全く自然な記号に基づく表現形式に関しても記号の恣意性に基礎を置くと考えていた（Ibid., pp. 86-89）。このことから、ソシュールにとってパントマイムも記号の一つであったことがわかる。ソシュールによってわずかに素描された記号学はパースが精緻化し、記号は恣意性の大小の度合いにしたがって、アイコン、インデックス、シンボルに分けられた（Ibid., p. 461）。パースはシニフィエとシニフィアンの恣意性には程度があり、三つの記号の中でアイコンがシニフィエに最も類似した記号と分類した<sup>14)</sup>。このことから、デ・マウロは手振りや身体表現などをシニフィエに最も類似した記号、つまりアイコンとみなした。

このように、デ・マウロは記号学の視点にもとづき、言語にはさまざまな記号が存在すると考えた。そしてその一つ、身振りに関して「当然ながら、聴覚＝発声的なコミュニケーションに劣らず、豊かに分節された身振り＝視覚的なコミュニケーションは確かに可能である」（Ibid., p. 419）と言及していることから、コミュニケーションの際、身振りも口語に劣らず意味を伝達する大切な記号であると認識していた。したがって、デ・マウロは伝達手段としての言語にさまざまな記号が存在することを明言し、それら記号に話し言葉と変わらぬ価値を見出していた。

### 3.2 政治思想を起源とする *plurilinguismo*

次に、「複言語能力」としての *plurilinguismo* の起源を検討する。デ・マウロはパゾリーニにもとづき、言語体験によって蓄積された複数言語を、コミュニケーションや創作活動において用いる能力が *plurilinguismo* であると考えた。

デ・マウロがパゾリーニの言語活動を *plurilinguismo* と形容したのは、それまでのイタリアにおける文芸批評に *plurilinguismo* の発想が存在したためと考えられる。しかし、「複言語能力」としての *plurilinguismo* は文芸批評の概念の借用だ

けではなく、政治的な意図を含有している。それを示す箇所を検討する。

パゾリーニはグラムシに出会うと、創造的でより広い視野でのそれ（異なる個別言語の使用）がパゾリーニに見られるようになった。（…）グラムシはパゾリーニに異なる表現素材（机上で想像した、また、カザルサの人々から集めたフリウリ語、学術的イタリア語と口語イタリア語、ローマの俗語的仲間言葉や50～60年代の教養ある口語や文語の散文、口語ではない映画や写真や絵などの中間的表現）を使うように暗示した。その使用は自己満足のためではなく、苦悩と希望を持つ階層にとって新たな関係性を生み出す流れとなるような、ヘゲモニー文化の手段になる可能性を試みるためであった。

（“Pasolini : della stratificazione delle lingue all'unità del linguaggio” ottobre1976, p. 247）

デ・マウロは、パゾリーニがグラムシと出会い、異なる言語表現の着想を得たことを比喩的に表現している。このパゾリーニの表現活動は、「苦悩と希望を持つ階層の新たな関係性を生み出す流れとなるような、ヘゲモニー文化の手段になる可能性を試みるため」とある。これは何を意味するのか。このデ・マウロにおけるパゾリーニ理解を解明するためには、グラムシ、パゾリーニ、そしてデ・マウロの政治思想や言語哲学を理解する必要がある。

グラムシはイタリア共産党創始者の一人であり、マルクス主義の思想家である。1926年にファシズム政権下で逮捕され、10年にわたって投獄された後、1937年に脳出血で死去する。グラムシは獄中においてマルクス主義にもとづく3000ページ近くになるノートを書き、社会学、政治学、大衆心理、文学などにわたる著述を後世に残した（グラムシ、1986、pp. 335-342）。

パゾリーニはグラムシの死後、共産党に入党するも、未成年への淫行容疑で党から除名処分を受けたが、その後もパゾリーニは生涯を通じて共産主義を信奉した。一方、デ・マウロは共産主義者

ではなかったものの、左派を貫き、共産党紙への執筆や、共産党から議員として選出されるなど、共産党とは近い関係にあった。このように政治への関与を考えると、この三者に政治思想の親和性を認めることは困難ではない。

では、グラムシの政治思想と言語哲学とはどのようなものであったか。まず、グラムシの政治思想の中心的概念はヘゲモニーである。ヘゲモニーとは国家に疎外されている人間の本质を再び市民社会へ奪い返すことであり、支配・被支配のせめぎあいによって、構成される現存の秩序を新しく組みかえることであり、より意識の高い人々とそうでない人々の知的・感性的交流によって知的同質化を形成することである（黒沢、2007、p. 15）。また、言語に関してグラムシは「言語（活動）は文化と哲学とをさえ意味する」とも明言し、言語活動を非常に重視していたことがわかる。人間はいずれも自分自身の個人的言語や思考の方法を持っており、言語活動により相互に理解しあうとしている。そして、歴史的行為を実現するためには、異質な目的を持ったばらばらの意思が、共通の世界観を基礎にして、同一の目的に向かって一つに接合されるような「文化的、社会的」統一の達成が前提となると訴え、そこから一般的言語問題の重要性がわかると断言している（グラムシ、1986、pp. 269-272）。ここでの一般的言語問題とはイタリアに横たわる言語問題、つまり複数言語の問題を指す。異なる言語を話す者たちが、どのように共通の意思を持ち、歴史的な統一を目指すのか、グラムシは思考していた。しかし、単一言語により集団を統合する意思を持っていたわけではない。すでに言及した通り、グラムシ自身がサルデーニャ語話者であり、イタリアには多くの個別言語があると認識しており、複言語を肯定する立場にあった。グラムシは1922年から1923年にかけてのモスクワ滞在のあいだにレーニンの言語政策を目の当たりにする。レーニンは政治・行政・教育において強力な中央集権制を選択していたが、言語においては全面的に複数の言語を認めていた。グラムシはソビエトで学ぶべき言語政策の具体例を見出したのである（Carlucci、2005、p. 74）。

このようなグラムシの政治思想や言語哲学をもとに引用箇所を解釈すれば、「異なる言語素材」とはイタリア語以外の方言や少数言語、さまざまな社会階層の言語を用いることを暗示するものである。それらの言語を用いることは「苦悩と希望を持つ階層」つまり、イタリア語を話さず、権力を持たない少数言語話者、労働者階級、農民といった下層階級が覇権をつかむことに寄与し、一部権力を持つ階級や国家に対する抵抗を意味しているのである。パゾリーニはこのような政治・言語思想を、少数言語であるフリウリ語や多様な社会領域の言語を使用した作品など、複数言語で表現することにより実現するのであり、デ・マウロはこれを複言語能力と評したのである。

このようなグラムシの政治思想や言語哲学を背景にするならば、複言語能力としての plurilinguismo は、デ・マウロの客観的な言語学の知見に由来する plurilinguismo とは異なり、個人的な政治思想を帯びていることがわかる。そしてこの政治思想こそが plurilinguismo を言語教育へと展開させた契機となったのである。グラムシは一般的言語問題、つまり複言語の問題は教育学説と教育実践に近づけなければならないと示唆している(グラムシ, 1986, pp. 269-272)。またグラムシは、言語活動は科学的処理能力や自立した社会的知識人としての能力、社会的な過程・闘争の中での理解や批判につながると考えていたが(De Mauro, 1975b, p. 92)、デ・マウロもそれを受け、高い文化や批判的能力を持つ個人、つまり、誰かに抑圧され、従属させられた者でもなく、従順な者でもなく、新たな問題に立ち向かい、解決を生み出す能力がある男女を育てるための開かれた教育が必要であり、それが複言語教育であると主張している(De Mauro, 1975a, p. 127)。

デ・マウロが構想した言語教育は、個々人が保持する複数の言語能力を認め、高い文化と批判的能力を持つ人間を育てることに集約される。そしてデ・マウロはこのような言語教育を具現化するために、政治思想としての plurilinguismo の「複言語能力」を援用しながら民主的言語教育を提唱したのである。

デ・マウロは、民主的言語教育の必要性につい

て説くにあたり、イタリア憲法第3条、すなわち「すべての市民は、等しい社会的権威を持ち、法律の前に平等であり、性、人種、言語、宗教、政治的意見、人的および社会的な条件によって差別されない」<sup>15)</sup> という条文を引用し、人間が言語によって差別されることがあってはならないと力説している(De Mauro, 1975b; De Mauro, 1983; Ferreri&Guerrero, 1998 他)。平等な社会の実現を目指すデ・マウロの強い政治的信念は、言語学を基盤として構想された plurilinguismo の概念と結びつき、複言語教育の実現へむけた民主的言語教育へと進展したのである。

#### 4. 終わりに

本稿は、1970年代のイタリアにおける民主的言語教育が内包する plurilinguismo の形成をデ・マウロの言説をもとに検討し、民主的言語教育の基盤にある plurilinguismo という概念を解明した。plurilinguismo は1960年代から1970年代にかけて民主的言語教育の提唱者であるデ・マウロが言語学において構想した言語思想であり、「複言語状態」(ある領域において複数の言語が共存する状態、多言語状態・一つの個別言語にさまざまな言語の性質が共存する状態・言語に多様な記号が存在する状態)、「複言語政策」(多言語地域において政治的に複数の言語使用を認める政策)、「複言語能力」(個々人の言語体験によって蓄積された複数の言語を、コミュニケーションや創作活動において用いる能力)を意味する。そして、この plurilinguismo を構想するにあたりデ・マウロはソシユールの一般言語学や記号論、歴史的・社会的言語研究の言語学的知見を基盤とする一方で、グラムシの政治思想や言語哲学を反映させながら、「複言語教育」として、民主的言語教育へと展開したのである。

1970年代のイタリアにおける民主的言語教育の plurilinguismo は、現在の言語教育で一般的に認識されている複言語主義とは起源も概念も同一ではない。しかし、そこには著しい親和性を認めることができる。今後は plurilinguismo の概念を内包する民主的言語教育の具体的な教育論に迫り、

欧州評議会が唱える複言語主義との比較と考察を課題としたい。

### 注

- 1) Dieci Tesi 発表後、20年目にデ・マウロに対して行ったインタビューにおいて、デ・マウロ本人が70年代の民主的言語教育の構想期を振り返り述べている (Ferreri&Guerrero, 1998, p. 17).
- 2) Legge 16 giugno 1977, n. 348
- 3) イタリアの主要な辞書, *Grande dizionario italiano dell'uso* (De Mauro, 1999), *Grande Dizionario della Lingua Italiana* (Battaglia, 1986), *lo Zingarelli: vocabolario della lingua italiana* (Zingarelli, 1977) の辞書に plurilinguismo の語源や例文などの出典が示されているが、その中で最も古いものが De Mauro (1999) である。その出典が指し示す Gianfranco Contini (1951) "Preliminari sulla lingua del Petrarca" (*Paragone Letteratura*, 1951, vol. 16) において plurilinguismo の使用が認められる。
- 4) 17頁の quadrilinguismo とは異なるが、ここでは大きくフランス語系とイタリア語系の言語に分け、bilinguismo と述べていると考えられる。
- 5) 該当箇所では詳しく述べられていないが、ファシズム時代にムッソリーニにより、この地域にイタリア人労働者移民政策が推進されたことによりイタリア語化が進み、フランス語使用が大きく後退した (バッジオーニ 2006, pp. 412-413)。
- 6) Costituzione della Repubblica italiana, Art. 6, 1947: 「共和国は特別な規程により、言語少数者を保護する」
- 7) 1970年代の共産党には、共産党の完全な党員でもなく、その教義に完全に従うわけでもないが、ある程度合意している者で形成されたリストから議員を選ぶ Sinistra Indipendente という仕組みがあった。デ・マウロはそのリストに並ぶ一人であった。
- 8) カタルーニャのサルバドル・プッチ・アンテックは反政府組織の資金調達のため銀行強盗を繰り返した罪で1974年に死刑となった。
- 9) パゾリーニは "Nuove questioni linguistiche" (Pasolini, 1964) において、普及し始めた科学技術用語がイタリア語に多大な影響を与えており、その領域が社会のあらゆる領域を対象として、各方面の言語を統一化する傾向があると考え、過去の堆積と現在の状況とを包摂し、集成しうる新しい言語として *linguaggio tecnologico* を模索していた。(鈴木, 2010, pp. 5-6)
- 10) デ・マウロが編纂した辞書, *Grande dizionario italiano dell'uso* (1999) の意味を参照。
- 11) デ・マウロが編纂した辞書, *Grande dizionario italiano dell'uso* (1999) の意味を参照。
- 12) 続く解説にて、「『文学言語』を(…)もっと一般的な意味で共同体全体のための文化的言語と

解する。(…)文学言語は一朝一夕で溶け込むことはないので、住民の大部分は二言語使用となり、すべてのひとの言語とともに、地方俚語を話す」とある。つまり、文学言語とは、文字化された文化的に高次の言語であり、共通語や統一言語になり得るものである。

- 13) 山内の訳は「特有語」であるが、イタリア語におけるイディオム *idioma* は「個別言語」を指す。
- 14) パースの論を詳述すると、記号と対象との関係は、第一に、あるものと写真のような主として類像的な関係である「アイコン(アイコン)性」、第二に、風向きと風見鶏のようなもっばら近接的關係である「インデックス性」、第三に、音声と文字のような主として一般的約定的な関係である「シンボル性」の3種に分かれる(有馬, 2014, p. 12)。
- 15) Costituzione della Repubblica italiana, Art. 3, 1947.

### 参考文献

- Ascoli, Graziadio Isaia (1873). *Scritti sulla questione della lingua, Proemio all'Archivio glottologico italiano, a cura di Corrado Grassi*, 2008, Einaudi, Torino.
- Balboni, Paolo E. (2009). *Storia dell'educazione linguistica in Italia*, UTET, Torino.
- Battaglia, Salvatore (1986). *Grande dizionario della lingua italiana*, Unione tipografico-editrice torinese, Torino.
- Carlucci, Alessandro (2005). "Molteplicità culturale e processi di unificazione. Dialecto, monolinguisimo e plurilinguisimo nella biografia e negli scritti di Antonio Gramsci" *Rivista italiana di dialettologia, lingue dialetti società*, vol. 29, CLUEB, Bologna, pp. 59-110.
- Contini, Gianfranco (1951). "Preliminari sulla lingua del Petrarca", *Paragone Letteratura*, n. 2, 1951, Sansoni, Firenze, pp. 3-26.
- Costanzo, Edvigo (2003). *Language education (educazione linguistica) in Italy: An Experience that could Benefit Europe?*, Council of Europe, Strasbourg.
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessments*. Cambridge University Press, Cambridge. [吉島茂・大橋理枝訳・編(2004). 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社.]
- Council of Europe (2007). *Guide for the Development of Language Education Policies in Europe, Language Policy Division*. Council of Europe, Strasbourg. [山本冨里訳(2016)『言語の多様性から複言語教育へ——ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド——』くろしお出版.]
- De Mauro, Tullio (1963). *Storia linguistica dell'Italia unita*, Laterza, Bari.
- De Mauro, Tullio (1975a). "Il plurilinguismo nella società e nella scuola italiana", *Scuola e linguaggio*,

- 1977, Riuniti, Roma, pp. 124-137.
- De Mauro, Tullio (1975b). "Per una educazione linguistica democratica", *Scuola e linguaggio*, 1977, Riuniti, Roma, pp. 88-123.
- De Mauro, Tullio (1977). *Le parole e i fatti*, Riuniti, Roma.
- De Mauro, Tullio (1983). *Sette lezioni sul linguaggio e altri interventi per l'educazione linguistica*, F. Angeli, Milano.
- De Mauro, Tullio (1999). *Grande dizionario italiano dell'uso*. UTET, Torino.
- Ferreri, Silvana & Guerriero, Anna Rosa (1998). *Educazione linguistica vent'anni dopo e oltre: che cosa ne pensano De Mauro, Renzi, Simone, Sobrero*, Scandicci, Firenze.
- GISCEL (1975). *L'educazione linguistica: Atti della giornata di studio Padova 17 settembre 1975*, Cooperative libreria editrice degli studenti dell'università di Padova, Padova.
- Lo Duca, Maria G. (2013). *Lingua italiana ed educazione linguistica*, Carocci, Roma.
- Pasolini, Pier Paolo (1964). "Nuove questioni linguistiche" *Saggi sulla letteratura e sull'arte*, 1999, Milano, Mondadori, pp. 1245-1275.
- Zingarelli, Nicola (1977). *Lo Zingarelli: vocabolario della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.
- 有馬道子 (2014). 『改訂版 パースの思想——記号論と認知言語学』岩波書店.
- グラムシ, アントニオ (山崎功監修)(1986). 『グラムシ選集 1』, 合同出版.
- 黒沢惟昭 (2007). 『現代に生きるグラムシ——市民的ヘゲモニーの思想と現実——』, 大月書店.
- 鈴木真由美 (2010). 「バゾリーニと現代イタリア語の問題: 『新しい言語問題』(『異端経験論』)を中心に」『言語・地域文化研究』no. 16, 東京外国語大学大学院, pp. 1-13.
- デ・マウロ, トゥッリオ (山内貴美夫訳) (1976). 『「ソシュール一般言語学講義」校注』, 而立書房, *Corso di linguistica generale, Introduzione, traduzione e commento di Tullio De Mauro*, Tullio De Mauro, 1967, Laterza, Bari.
- 西山教行 (2010). 「複言語, 複文化主義の形成と展開」, 『複言語・複文化主義とは何か——ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』, くろしお出版, pp. 22-34.
- バジジョーニ, ダニエル (今井勉訳) (2006). 『ヨーロッパの言語と国民』筑摩書房, *Langues et nations en Europe*, 1997, Payot & Rivages, Paris.
- プリバー, エドモンド (大島義夫・朝比賀昇訳) (1957). 『エスペラントの歴史』, 理論社.

## Construction of Democratic Language Education in Italy in the 1970s —— Tullio De Mauro's Conception of Language Education and Plurilingualism ——

Yoriko NISHIJIMA

Graduate School of Human and Environmental Studies,  
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

*Abstract* The purpose of this paper is to clarify the plurilingualism of democratic language education developed in Italy in the 1970s by analysing the writing of Tullio De Mauro. Democratic language education is said to have an affinity with plurilingualism, which is the philosophy of language education of Council of Europe, but the political context and era are different from those of the Council of Europe. De Mauro, a linguist who advocated this democratic language education, used "plurilinguismo" in papers, and such etc. from the 1960s to the 1970s before advocating it in the academic community. Analysing the concept of plurilinguismo, as used by De Mauro, it can be classified into the following three categories: plurilingual state, plurilingual policy, and plurilingual ability. I define "plurilingual state" into three analytical parts. First, a multilingual state. Second, a situation in which a language has multiple stylistic variations. Third, a situation in which a language has multiple symbols of expression. The "plurilingual policy" permits political use of multiple languages in multilingual areas. Finally, "plurilingual ability" is defined as the ability to use multiple languages gained by an individual's linguistic experiences. Also, when considering the origin, we found that "plurilingual state" and "plurilingual policy" are derived from general linguistics such as Saussure's theory and semiotics, and historical and geographical language studies. On the other hand, "plurilingual ability" encompasses the political thought of De Mauro, and it became clear that this was influenced by Gramsci's language philosophy and led to democratic language education in the form of "plurilingual education".